

障がいを持つ学生が実践できるキャンプ実習プログラムの試み

片山 昭義* 中島 悠介*

要約

2016年「障害者差別解消法」が施行され、大学教育機関においても障がいを持つ学生に対して合理的配慮が求められている。そこで2017年度本学健康スポーツコースにおいて車椅子を利用する学生の入学が予定されていることから、学外で実施されるキャンプ実習について実習施設及び実習プログラムを検討することとした。実習施設の候補を挙げ、実地踏査や施設担当者とのヒアリング、資料等の情報を精査して実習施設を仮定した後、本学キャンプ実習の特長を継承しつつ実習施設の魅力を活かした実習プログラムの作成を試みた。

キーワード 障がい学生、キャンプ実習、野外活動、共生社会

目次

1. はじめに
2. 本学キャンプ実習の概要
 - (1) 目的
 - (2) 対象
 - (3) 開催時期
 - (4) 特徴
 - (5) 実習施設「群馬県おにし青少年野外活動センター」について
 - (6) キャンプ実習のプログラム構成
3. 方法
4. 結果と考察
 - (1) 第一段階（実施施設の選定）
 - (2) 第二段階（活動プログラムの検討）
5. まとめ

1. はじめに

2016年4月1日「障害を理由とする差別の解消の促進に関する法律」（障害者差別解消法）が施行された。これは国連の「障害者の権利に関する条約」の締結に向けた国内法制度の整備の一環として行われたもので、全ての国民が障がいの有無によって分け隔てられることな

く、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障がい理由とする差別の解消を推進することを目的としている^[1]。

これらのことは高等教育機関にも求められており、障がいを理由に入学を受け入れないことは、憲法第26条2項に定める「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」という点や、発達障害者支援法第8条2項に定める「大学及び高等専門学校は、発達障害者の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする。」という点において困難になってきている。また、独立行政法人日本学生支援機構では、2009年より「教職員のための障害学生修学支援ガイド」を刊行し、障がい学生への修学支援の充実に取り組んでいるところである。

このような状況の中、本学の障がい学生の受け入れについては、これまで教育施設の改修や障がい学生支援室の設置、障がい学生支援委員会による学生生活の支援等が行われてきたが、キャンプ実習やスキー実習など学外で実施される学習活動への参加は、対応できていないのが現状である。2010年に施行されたスポーツ基本法の第2条5項には「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」と規定されており、本学における早期の取り組みが課題となっている。

そこで、2017年度に車椅子を利用する学生が入学予定であり、更に本学健康スポーツコースを希望していることから、当該学生が参加可能であり、かつ本学キャンプ実習の特長を活かした実習施設の選定や実習プログラムのあり方について検討を試みたい。

2. 本学キャンプ実習の概要

(1) 目的

浦和大学総合福祉学部2016SYLLABUSによると「先ず、自分が自然での生活体験を学びながら、他方で、障害児（者）や高齢者に対する野外での生活援助技術技法を学ばせる。」^[2]とされており、キャンプの経験が無いもしくは経験が少ない学生に対して先ずは自らがキャンプを経験し、その経験を踏まえて将来の援助対象者である高齢者や障がい児（者）に対する援助の手段となり得ることを理解するとともに、具体的な援助技術を習得することを目的としている。

(2) 対象

主に総合福祉学部1年生と短期大学部介護福祉科1年生を対象としており、例年30名程度の参加者により実施している。

(3) 開催時期

例年8月末から9月初めにかけた平日4日間（3泊4日）で実施している。学生が夏期休暇中であることと、小・中・高校生の夏休み最後の土日を避けることにより、実習施設を比較的自由に使用できることからこの時期を選んでいる。

(4) 特徴

2015年度に実施したキャンプ実習のプログラムを例にとると、3つの特徴を示すことができる。1点目は「食のプログラムの充実」である。普段の生活の中でも食事を自分で作ることが少ない学生にとって、仲間と協力して食事を作りそして一緒に食べることは、貴重な体験となっている。また通常の食事以外にも「食を楽しむプログラム」という時間があり、2014年度は手打ちうどん、2015年度はかまど作りから行う手作りピザ、2016年度はバウムクーヘンと毎年工夫が凝らされており、作る過程と食べる過程がより楽しめるプログラムも例年満足度が高くなっている。2点目は「夜のプログラムの充実」である。1日目は「ソロキャンプ（暗闇で10分間ほ一人で過ごす活動）」、2日目は「ナイトイベント（学生スタッフによる企画）」、3日目は「キャンプファイヤー」となっており、キャンプ場ならではの暗闇を利用したプログラムは、学生同士の心理的距離を近づける効果があるようである。3点目は「学生スタッフの介入」である。参加者である1年生に対して、学生スタッフの2年生がプログラムの進行やグループ内のコミュニケーション促進、そして参加者一人ひとりへの声掛けなど積極的に関わることにより、不安や緊張などが早期に緩和し、キャンプ場という非日常の環境で前向きな行動が促進されるのである。

(5) 実習施設「群馬県おにし青少年野外活動センター」について

キャンプ実習で利用している群馬県おにし青少年野外活動センター（以下、おにしセンターとする）は、群馬県の南西部埼玉県境に位置し、眼下には神流湖（下久保ダム）を見下ろす高台にあり、自然に囲まれた環境にある^[3]。運営はNPO法人青少年体験活動研究所が行い、公益社団法人日本キャンプ協会認定優良キャンプ場にも指定されている。以下、おにしセンターが作成する利用案内を参照し概要をまとめる^[4]。

①所在地：〒370-1403 群馬県藤岡市保美濃山1550

②アクセス：JR高崎線新町駅よりバス50分

③移動時間：1時間50分（移動距離：約117.3km、経路：東川口駅南口→東北自動車道→首都圏中央連絡自動車道→関越自動車道→現地）

移動時間	1時間50分
------	--------

④敷地面積 32,000㎡

⑤キャンプ施設

- ・管理宿泊棟：<1階>研修室（100名）、食堂（75名）、テラス、宿泊室4名定員×1室、浴室男女各1室、トイレ男女（車椅子対応あり）
- <2階>事務室、宿泊室7室定員57名（最大67名）、トイレ男女、ロビー、バルコニー
- ・第1キャンプ場：テントサイトA～D、野外活動棟（炊事場）、炊飯棟、野外トイレ
- ・第2キャンプ場：テントサイトA～F、水くみ場
- ・第3キャンプ場：バンガロー6名定員×5棟、炊事場（山の家10名×2室）
- ・芝生広場（軽スポーツ、レクリエーションに利用可）

- ・体育館（ミニバスゴール、暖房施設、クライミングボード）
- ・アドベンチャー活動用具を常設

⑥実施可能プログラム

活動プログラム 13種目

マウンテンバイク、カヌー、ウォールクライミング、芝すべり、流しそうめん、農業体験、でーだらぼっちの森（散策、アドベンチャー体験等）、雨降山登山、川遊び、クラフト（ガラスエッチング、革細工、だるまの絵付け）、その他様々な活動がありセンターにて応相談

⑦利用料金（1泊3食1人当たり、消費税込み）

- 1) キャンプ場宿泊料 1,080円
- 2) 入浴料 432円
- 3) 寝袋レンタル料 540円
- 4) 食事料金（朝食648円、昼食810円、夕食1,026円） 合計2,484円

1泊3食合計4,536円

⑧緊急対応施設

- ・鬼石病院（救急指定：内科、外科、眼科、整形外科） おにしセンターから10.2km 車で17分
- ・栗原胃腸科外科病院 おにしセンターから16.2km 車で29分
- ・公立藤岡総合病院（救急指定） おにしセンターから20.7km 車で38分
- ・鬼石交番 おにしセンターから15.9km 車で32分
- ・鬼石消防署 おにしセンターから9.9km 車で16分
- ・藤岡市鬼石総合支所 おにしセンターから10.6km 車で20分

救急車搬送時間 33分

⑨雨天時の対応

少雨の場合、屋根のある野外活動棟（炊事場）に移動することができるが、スペースが狭いため実施可能なプログラムには制約がある。その他、管理宿泊棟の研修室や体育館は空いていれば追加で利用することができる。大雨の場合、避難の必要がある場合には管理宿泊棟が避難場所となっている。

(6) キャンプ実習のプログラム構成

本学キャンプ実習は3泊4日の行程で行われ、おにしセンターの特性を活かしてプログラムが構成されている。以下、おにしセンターの施設ごとに本学キャンプ実習で実施したプログラムを列挙する。

①芝生広場

- ・仲間づくりのプログラム（コミュニケーション・ゲーム） 1日目13：00～14：00
- ・テント設営法 1日目14：00～15：30
- ・季節を感じるプログラム（班対抗ゲーム大会） 2日目14：00～16：00
- ・野外でのイベント企画法及び体験（ナイトイベント） 2日目19：00～21：00

- ・ キャンプファイヤー 3日目19:00~21:00 ※キャンプファイヤー場も利用
- ②でーだらぼっちの森
 - ・ ソロキャンプ 1日目19:00~20:00 ※プログラム進行の都合で中止
 - ・ 自然を感じるプログラム（ネイチャーゲーム） 3日目14:00~16:00
- ③神流湖（下久保ダム）
 - ・ 水を感じるプログラム（筏づくり） 2日目9:00~12:00
- ④野外活動棟（炊事場）
 - ・ 食を楽しむプログラム（ピザづくり） 2日目11:00~14:00
- ⑤センター全体
 - ・ 仲間と協力するプログラム（スポーツラリー） 3日目9:00~11:00

3. 方法

二段階に分けて検討を行う。まず第一段階は実習施設の選定である。事前の情報収集の段階で公的施設と民間施設の両方を候補に見据えてリストアップしたが、民間施設では車椅子利用者の受け入れが十分にできるとは言い難かった。一方公的施設は、開設当初から障がい者の受け入れを想定した設備が整っており、さらに前出の障害者差別解消法の施行により障がい者の受け入れを積極的に推進していることや、障がい者受け入れの実績を作ることが求められていること、障がい者受け入れのノウハウが蓄積されていることから、公的施設を検討の対象施設とすることとした。

検討の対象施設は、本学からの移動を考慮し、以下の4施設とした。

- (1) 国立妙高青少年自然の家（新潟県妙高市）
- (2) 国立赤城青少年交流の家（群馬県前橋市）
- (3) 国立那須甲子青少年自然の家（福島県西白河郡西郷村）
- (4) 国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町）

上記4施設を、これまでの本学キャンプ実習施設である「おにしセンター」との比較を試みる。比較する要素は以下のとおりである。

- (1) 集合場所（JR東川口駅南口）からの移動時間

NAVITIME地図・ルート検索 (<https://www.navitime.co.jp/>) を使い、渋滞などを考慮せず最短時間で移動できるルートを選択する。その際おにしセンターと比較し、移動時間が50%以上であれば1点、25%以上50%未満であれば2点、±25%未満であれば3点、-25%以上-50%未満であれば4点、-50%以上であれば5点とする。

- (2) プログラムの充実度

各施設においてパンフレットやホームページで紹介されている実施可能なプログラム例をカウントし、おにしセンターと比較したプログラム数を前述にならい点数化する。

(3) 料金

標準的な利用料として、1泊3食の料金をおにしセンターと比較する。宿泊費はテント1張りを5名で利用した時の1人当たりの料金。その他、入浴料やシュラフ（寝袋）のレンタル料など生活に必要な費用は計上するものとする。食事については本来野外炊飯が基本となるが、1人当たりの材料費が算出しにくいことから、施設で提供される朝食、昼食、夕食の料金を計上することとする。

(4) 緊急時の対応

救急車で搬送を想定し、最寄りの消防署から実習施設までの時間と実習施設から最寄りの救急医療施設までの時間を、それぞれNAVITIME地図・ルート検索にて算出し、合計時間をおにしセンターと比較して、点数化する。救急医療施設は、実習施設で紹介されている医療施設とする。

第一段階の目標としては、上記の比較検討を踏まえ本学キャンプ実習の特長を活かしつつ障がい学生が参加できるキャンプ場を仮定する。

第二段階としては、仮定した実習施設において、どのようなプログラムが実施可能であるか検討を試みる。期間は3泊4日、実習施設の特性と本学キャンプ実習の特長を活かしたプログラム案を検討することとする。

4. 結果と考察

(1) 第一段階（実習施設の選定）

各施設のパンフレットや利用ガイドの情報と、実際に実地踏査をした所感を含めて以下の情報をまとめる。実地踏査については、国立妙高青少年自然の家と国立赤城青少年交流の家は2016年11月9日（水）、国立那須甲子青少年自然の家は2016年12月11日（日）、国立磐梯青少年交流の家は2016年12月10日（土）に実施した。

①国立妙高青少年自然の家（以下、妙高自然の家とする）^[5]

1) 所在地：〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2

2) アクセス：JR信越本線 関山駅からタクシーで約10分、上信越自動車道 中郷ICまたは妙高高原ICから約15分（東京から自動車約3時間、電車で2時間30分）

3) 移動時間：3時間23分（移動距離：約282.2km、経路：東川口駅南口→東北自動車道→首都圏中央連絡自動車道→関越自動車道→北信越自動車道→現地）

移動時間	3時間23分
------	--------

4) 施設概要：本館宿泊棟（56室、定員400名）、キャンプ場（宿泊可能人数200名、炊事棟、キャンプセンター、トイレ）、キャンプファイヤー場（7か所）、サービス棟（学習室3室）、コスモス銀河棟（食堂、浴室、洗濯室、多目的ホール、研修室、利用者共用スペース）、プレイホール棟（プレイホール、クラフトルーム、スキルーム）、スバルホール（天体観察室、学習室）、

ふれあい棟（陶芸活動、調理実習室）

5) 活動プログラム：

活動プログラム 計86種目

ア) 夏季野外活動（34種目）

森のビンゴ、森の遊び、ハンドブックを使った自然観察、オリエンテーリング、妙高アドベンチャーオリエンテーリング、ネイチャーゲーム、炭焼き、森のレストラン、樹木オリエンテーリング、ナイトハイク、早朝野鳥観察、森の宝探し、森のつながり探し、何でも炭化実験、草花遊び、大洞原ハイキング、坪岳ハイキング、関温泉ハイキング、小池生物調査、森小屋作り、秘密基地作り、妙高アドベンチャープログラム（MA）、森の芸術家、フォト推理オリエンテーリング、ストレートハイク、源流探検、妙高火山学習、藤巻山登山、森は自然のダム（ブナ林探検隊）、火打山登山、妙高山登山、川の学習、スギ林と雑木林の下草観察、大田切川川遊び

イ) 冬季野外活動（19種目）

ソリ、チュービング、深雪探検、かまくらづくり、雪像づくり、雪合戦、雪上運動会、雪灯ろう作り、雪の結晶観察、アルペンスキー、歩くスキー、スノーシューハイク、かんじきハイク、藤巻山冬季冒険ツアー、坪岳冬季冒険ツアー、ボウボ岩冬季冒険ツアー、アニマルトラッキング、ネイチャースキー、ウィンタービンゴ

ウ) 炊事・レクリエーション活動（11種目）

野外炊事、うどん作り、そば打ち、キャンプファイヤー、キャンドルセレモニー、館内オリエンテーリング、館内ウォークラリー、館内フォトビンゴ、ニュースポーツ、ピザ作り、ソーセージ作り

エ) クラフト（工作）活動（19種目）

木の葉のTシャツ、陶芸（妙高焼き）、10連だこ、小枝のモックン、石のクラフト、草木染、マイスプーン・フォーク、透かし葉、ネームタッグ、森の壁掛け、森のはがき、杉板の壁掛け、杉板のはがき、焼杉板の壁掛け、実物大星座シート、妙高山モデル、ピンブローチ、スカイクリユー、ハンググライダー

オ) 学習活動（3種目）

星座観測、妙高の民話・昔話、奉仕活動

6) 利用料金（1人1泊あたり、消費税込み）

ア) シーツ等洗濯料 90円

イ) 食事（朝食470円、昼食520円、夕食650円） 合計1,640円

1泊3食合計1,730円

7) 緊急時の対応

ア) 消防署：上越地域消防事務組合 頸南消防署（妙高市大字田切629）

妙高自然の家より6.3km、9分

イ) 病院：新潟県立妙高病院（妙高市大字田口147-1）

妙高自然の家より8.7km、14分

救急車搬送時間 23分

8) 実地踏査担当者の所感

野外活動施設としてはとても充実していると思われる。ただキャンプ場内を障がい学生が移動する場合、高低差があり自力での移動には困難を伴う。またキャンプセンター内の研修室（わんぱくルーム）は2階にあり車椅子での移動は不可能である。そしてプログラムを展開する場合に、参加者全体が移動しなければならない範囲が広く、広大で豊かな自然環境がかえってプログラム運営の効率を妨げる恐れがある。最も懸念するポイントは、本学からの移動距離である。バス移動の場合途中休憩などを考慮すると5時間程度予定しなければならず、プログラム全体に占める移動時間の長さは熟考を要する。

②国立赤城青少年交流の家（以下、赤城交流の家とする）^{[6] [7]}

1) 所在地：〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山27

2) アクセス：JR両毛線 前橋駅から路線バスで約40分、関越自動車道 赤城ICから約20分（東京から自動車約1時間30分、電車で2時間）

3) 移動時間：1時間51分（移動距離：約121.2km、経路：東川口駅南口→東北自動車道→北関東自動車道→現地）

移動時間 1時間51分

4) 施設概要：宿泊棟（定員400名）、キャンプ場（宿泊可能人数80名、屋根付き広場、センター棟、トイレ、シャワールーム、研修室）、営火場（1か所）、AAP（あかぎアドベンチャープログラム）、管理研修棟（講堂、保健室、研修室）、特研棟（音楽室、和室）、アクティビティホール、プレイホール（陶芸乾燥室、洗濯室）、体育館、武道館（柔道場、剣道場）、浴室棟、サービス棟（宿泊室、食堂、売店）、テニスコート、多目的フィールド

5) 活動プログラム

活動プログラム 72種目

ア) 野外活動（18種目）

あかぎやま登山鍋割山コース、あかぎやま登山鍋割山・荒山縦走コース、あかぎやま登山地蔵岳・覚満淵コース、あかぎやま登山黒檜山・駒ヶ岳コース、あかぎやま登山鶉山コース、オリエンテーリング、アドベンチャーラリー、キャンプファイヤー、たき火、キャンドルファイヤー、ウォークラリー、ネイチャーゲーム、グリーンアドベンチャー、星空観察、あかぎ植物観察、あかぎ野鳥観察、ナイトウォーク、木の実ハンティング

イ) 仲間づくり（8種目）

あかぎアドベンチャープログラム（AAP）、レクリエーション、館内ラリー、館

内フォトラリー、グランドゴルフ、クッブ、キンボール、ディスクゴルフ

ウ) 食事づくり (3種目)

野外炊事、ドラム缶ピザ&ポトフ、うどん打ち

エ) ものづくり (20種目)

凧づくり、土笛・オカリナ、陶芸、七宝焼、てん刻、切り絵、新聞紙あそび、土器・はにわ、厚紙ブーメラン、ドリームキャッチャー、アロマキャンドル、スパー竹とんぼ、くるくる種、かんな箸づくり、ネイチャークラフト、勾玉、ミニサークルステンド、プラホルダー、森のこびん、押し花

オ) 環境活動 (1種目)

あかぎ森林守り隊

カ) その他 (22種目)

サッカー、ソフトボール、テニス、ラグビー、バレーボール、バスケットボール、卓球、バドミントン、ソフトバレーボール、フットサル、綱引き、長縄跳び、柔道、剣道、空手、インディアカ、ドッジビー、ボランティア活動、講演会、研究集会、学習活動、研修会

6) 利用料金 (1人1泊あたり、消費税込み)

ア) 寝袋用シーツ洗濯料 160円

イ) 食事 (朝食440円、昼食540円、夕食660円) 合計1,640円

1泊3食合計1,800円

7) 緊急時の対応

ア) 消防署：前橋市消防局北消防署白川分署 (前橋市富士見町小沢191-1)

赤城交流の家より5.8km、9分

イ) 病院：前橋赤十字病院 (前橋市朝日町3-21-39)

赤城交流の家より11.5km、25分

救急車搬送 34分

8) 実地踏査担当者の所感

キャンプ場の受け入れ人数が80名とコンパクトな会場であり、本学の実施規模であればほぼ貸切状態になると思われる。多くのプログラムを展開する広場が隣接していることや、雨天の場合屋根付き広場が利用できることなど、プログラムの実施効率が格段に高いことは特筆すべき点である。但し、障がい学生が宿泊する本館からは離れており、宿泊や入浴する場から活動する場への移動については、車を利用するなど検討が必要である。本学からの移動は高速道路のインターチェンジが近く便利である。

③国立那須甲子青少年自然の家 (以下、那須甲子自然の家とする)^{[8][9]}

1) 所在地：〒961-8071 福島県西白河郡西郷村大字真船字村火6-1

2) アクセス：JR東北新幹線 新白河駅から路線バスで約35分、東北自動車道 那須ICか

ら約40分（東京から自動車では約3時間、電車で2時間30分）

- 3) 移動時間：2時間21分（移動距離：約185.3km、経路：東川口駅南口→東北自動車道→現地）

移動時間 2時間21分

- 4) 施設概要：宿泊棟（定員546名）、キャンプ場（宿泊可能人数250名、キャンプセンター、トイレ、シャワー棟）、営火場（4か所）、プレイホール、わんぱくルーム、キビタルーム、エコルーム1・2、学習室1～4、ピロティ、自然館、食堂、売店、クリーニング室、浴室、乾燥室、つどいのひろば、ハンディロード、第一・第二スキー場、那須ロッジ

- 5) 活動プログラム

活動プログラム 43種目

- ア) 登山・ハイキング（10種目）

赤面山登山、甲子山登山、茶臼岳登山、那須連山縦走登山、剣桂ハイキング、野外冒険ハイキング、パノラマハイキング、沢歩きハイキング、奥甲子ハイキング、ナイトハイキング

- イ) 雪中活動（7種目）

ネイチャースキー、スノーシューハイキング、かんじきハイキング、雪上運動会、そりすべり、雪像づくり、かまくらづくり

- ウ) 調理・炊事活動（7種目）

野外炊飯、ピザ作り、パン作り、もちつき、そば打ち、うどん打ち、イワナつかみ・イワナ焼き

- エ) 創作活動（8種目）

白河絵付けだるま、焼き板、キーホルダー、竹とんぼ、竹はし、紙すき・紙作り、バードコール、ネイチャー万華鏡

- オ) ゲーム・レクリエーション活動（7種目）

オリエンテーリング、なすかしの森オリエンテーリング、室内オリエンテーリング、ビジュアルオリエンテーリング、キャンプファイヤー、キャンドルファイヤー、なすかしチャレラン

- カ) 歴史・文化活動（4種目）

熊撃ちの話、星座観察、白河歴史探検ウォークラリー、史跡等見学

- 6) 利用料金（1人1泊あたり、消費税込み）

- ア) 寝袋用シーツ洗濯料 100円

- イ) 食事（朝食450円、昼食520円、夕食670円） 合計1,640円

1泊3食合計1,740円

- 7) 緊急時の対応

- ア) 消防署：白河消防署西郷分署（福島県西白河郡西郷村熊倉字折口原40）

那須甲子自然の家より13.6km、17分

イ) 病院：白河厚生総合病院（福島県白河市豊地上弥次郎2-1）

那須甲子自然の家より19.9km、28分

救急車搬送時間 45分

8) 実地踏査担当者の所感

国立の青少年教育施設として初期に設置され歴史が長く、障がい者の受け入れについても事例が多くあり、豊富なノウハウを持っていると思われる。設備については、広大な敷地の中で比較的自由にプログラムが展開できそうであるが、特筆すべき点はプレイホールに屋内のキャンプファイヤー設備があることである。天候に左右されずプログラムを運営できることは、大きな利点であると考えることができる。ただ、障がい学生の移動を考えた時に、通路が整地されていない部分があったり、高低差があることなどは、運営時の配慮が必要であると思われる。

④国立磐梯青少年交流の家（以下、磐梯交流の家とする）^{[10] [11]}

1) 所在地：〒969-3103 福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原7136-1

2) アクセス：JR磐越西線 猪苗代駅から路線バスで約10分、磐越自動車道 猪苗代磐梯ICから約15分（東京から自動車で約3時間30分、電車で2時間30分）

3) 移動時間：3時間（移動距離：約251.3km、経路：東川口駅南口→東北自動車道→磐越自動車道→現地）

移動時間 3時間

4) 施設概要：宿泊棟（定員475名）、キャンプ場（宿泊可能人数250名、キャンプ管理棟、野外トイレ）、営火場（4か所）、本館（第1～6研修室、多目的室、コミュニケーションルーム1・2、和室・茶道室）、講堂、談話棟（ミーティングルーム、ラウンジ、ビューラウンジ、セミナー室、自然観察室、天体観察室、ネイチャーライブラリー）、武道館、総合研修館、体育館、テニスコート、フットサルコート、野球場、グラウンド・サッカー場、弓道場、つどいの広場、ふれあい広場、野外ステージ、休憩所、ボランティア棟

5) 活動プログラム

活動プログラム 108種目

ア) 登山・トレッキング（10種目）

磐梯山登山4コース、安達太良山登山2コース、雄国沼トレッキング2コース、デコ平トレッキング2コース

イ) ハイキング・ウォーキング（9種目）

天鏡台ハイキング、桧原湖畔探勝路ハイキング、五色沼探勝路ハイキング、中瀬沼探勝路ハイキング、達沢不動滝ハイキング、ナイトハイキング3コース、ナイトハント

ウ) 自然観察 (5種目)

動植物の観察、天体観察、自然観察ゲーム、森のクラフト、猪苗代湖水浴

エ) オリエンテーリング・ウォークラリー (15種目)

野口英世ウォークラリー2コース、天鏡台ウォークラリー、歴史探訪ウォークラリー、白虎隊ウォークラリー、ジオウォークラリー、ポイントオリエンテーリング、スコアオリエンテーリング、樹木オリエンテーリング、ココどこオリエンテーリング (屋外)、ココどこオリエンテーリング (屋内) 3コース、宇宙文字オリエンテーリング、スローガンオリエンテーリング

オ) 野外炊飯 (7種目)

野外炊飯、ピザ作り、うどん打ち、空き缶ご飯、ビニール袋ご飯、ミステリークッキング、チョイスクッキング

カ) スポーツ・レクリエーション活動 (24種目)

キャンプファイヤー、ボンファイヤー、キャンドルサービス、キャンドルライト、軟式テニス、硬式テニス、バドミントン、卓球、野球、ソフトボール、バレーボール、ソフトバレーボール、柔道、剣道、空手、弓道、陸上競技、レクリエーションゲーム、サッカー、フットサル、長縄跳び、キンボールスポーツ、ドッジビー、ドッジボール

キ) 創作活動 (16種目)

赤べこ絵付け、合格だるま絵付け、七宝焼き、絵ろうそく、獅子頭絵付け、会津切り絵、張子十二支、会津唐人凧作り、三春駒絵付け、会津塗絵付け、合格天神だるま絵付け、土鈴の絵付け、会津漆蒔絵、流紋焼きてびねり、流紋焼き絵付け、森のクラフト

ク) 冬季の野外活動 (9種目)

アルペンスキー、スノーボード、クロスカントリースキー、そり、スノーチューブ、スノーシュー、かまくら作り、雪像作り、イグルー作り

ケ) 芸術・文化活動 (13種目)

合唱、合奏、絵画、写真撮影、書道、社交ダンス、演劇、よさこい、講義・講演、座禅、茶道、華道、猪苗代の民話

6) 利用料金 (1人1泊あたり、消費税込み)

ア) 寝袋用シーツ洗濯料 200円

イ) 食事 (朝食420円、昼食560円、夕食660円) 合計1,640円

1泊3食合計1,840円

7) 緊急時の対応

ア) 消防署：猪苗代消防署 (福島県耶麻郡猪苗代町梨木西19-1)

磐梯交流の家より4km、6分

イ) 病院：町立猪苗代病院 (福島県耶麻郡猪苗代町大字千代田字中島26-2)

磐梯交流の家より3.8km、6分

救急車搬送時間 12分

8) 実地踏査担当者の所感

猪苗代湖や猪苗代町に隣接しており、鉄道の駅や高速道路のインターチェンジ、商店や医療施設など利便性が高いことが特徴である。またキャンプ場の充実はもとよりサッカー場や陸上競技場、野球場、テニスコート、野外ステージなど本格的な活動施設が整備されている。障がい学生の移動は問題ないと思われるが、すべての通路が整地されているわけではないのでサポートスタッフ等の措置が必要である。東京からの移動は3時間ということで、長時間の移動になることを念頭に置いたプログラム設計が必要となる。

⑤実習施設の仮定

これまでの実習施設であるおにしセンターと候補に挙げた4施設について、4つの視点での比較を表1に示し、比較項目ごとの考察を以下にまとめる。

表1 実施施設検討のための比較表

	移動時間	活動プログラム	料金	救急車搬送時間	得点合計
おにし青少年 野外活動センター	110分	13種目	4,536円	33分	-
国立妙高 青少年自然の家	203分 184.5% 1点	86種目 661.5% 5点	1,730円 38.1% 5点	23分 69.7% 4点	15点
国立赤城 青少年交流の家	111分 100.9% 3点	72種目 553.8% 5点	1,800円 39.7% 5点	34分 103% 3点	16点
国立那須甲子 青少年自然の家	141分 128.2% 2点	43種目 330.8% 5点	1,740円 38.4% 5点	45分 136.4% 2点	14点
国立磐梯 青少年交流の家	180分 163.6% 1点	108種目 830.8% 5点	1,840円 40.6% 5点	12分 36.4% 5点	16点

注：各項目右側上段はおにしセンターに対する各施設の比較項目を百分率で表したものである
同じく下段はおにしセンターを基準（3点）とする比較項目を点数化したものである

1) 移動時間について

キャンプ場は自然環境の豊かな場所に設置されていることが多く、おのずと都市部から離れる必要がある。その意味でおにしセンターは交通の利便性の良い会場であった。今回比較した4施設は、移動時間が多くかかる傾向にあったが、その中で赤城交流の家はおにしセンターと同等の移動時間であり、実習プログラムを検討するにあたり有利な立地であると考えられる。

2) 活動プログラムについて

今回各施設のパンフレットや利用ガイドの情報をもとに検討要素をまとめたが、そ

もそも国立少年自然の家については、「独立行政法人国立少年自然の家法」に「独立行政法人国立少年自然の家は、少年（学校教育法に規定する学齢児童及び学齢生徒）を自然に親しませつつ行う団体宿泊訓練を行うとともに、その設置する施設を少年の団体宿泊訓練のための利用に供すること等により、健全な少年の育成を図ることを目的とする。」と定められており、活動プログラムの豊富さがその目的達成に寄与すると考えられることから、様々な設備や用具・備品の整備がすすめられている。よってどの施設を利用するにしても、多様なプログラムから選択することができる。

3) 料金

今回比較する4施設はいずれも国立の施設であることから、必要となる費用はシュラフと一緒に使用するシーツの洗濯代と食費のみであり、その他の施設利用料は一切不要であった。比較するおにしセンターは民間施設であることから、料金に大きな差があることが明らかになった。当初、障がい学生の利用を念頭においた実習プログラムの検討を進めるために国立施設を検討対象としたが、参加学生が負担する参加費や大学予算で負担する実習経費について大きく削減できる可能性があることが明らかになった。

4) 救急車搬送時間

活動プログラム中において重篤な事故が発生した場合、素早い救急処置と医療機関への搬送が重要なポイントとなる。本学キャンプ実習は、スタッフ体制に看護師を配置しているので救急処置については万全の態勢を整えているが、実習施設によって医療機関への搬送時間に差があることはあらかじめ考慮しなければならない。今回救急車が消防署から出発し、実習施設で傷病者を乗車させ、医療施設に搬送する合計時間を比較したところ、おにしセンターにてかかる搬送時間と同等かそれ以下の施設が多いことが分かった。

以上の検討を踏まえた結果、赤城交流の家が実施会場として適切と考える。適切と考えたポイントは以下の視点である

- ・集合場所からの移動時間を考えた場合、途中の渋滞などのリスクが大きく、移動時間が長くなるほどプログラムの進行に影響を与えると思われる
- ・障がい学生の参加を念頭に置いており、医療機関へのアクセスは従来と比較して劣っていない
- ・実地踏査担当者の所感より、雨天時のプログラムの実施に影響が少ない

(2) 第二段階（実習プログラムの検討）

第一段階での検討により、赤城交流の家を実習施設と定めた場合の実習プログラムの検討を行う。検討を行う場合の視点としては次の3点を考慮する。

1点目は、これまで実施してきた実績を踏まえ教育的効果の高いプログラムを位置づけることである。2点目は、今回の会場変更により選定した実習会場でしか体験できないプログ

ラムを位置づけることである。特にキャンプ場から離れた周辺の自然環境を活かしたプログラムについては、積極的に考慮したい。3点目は、すべてのプログラムを通して車椅子利用の学生でも参加できることである。必ずしも健常学生と一緒に体験はできないまでも、その一部や同様の楽しさを体験できるプログラムを検討したい。

①これまで実施してきた教育的効果の高いプログラム

1) コミュニケーションゲーム (所要時間：60分、担当：教員)

会場に到着し、開会式直後に行われるプログラムである。参加者の緊張をほぐし、参加者同士または参加者と学生スタッフの交流を促す。そして、これから始まるキャンプ実習への参加意欲を醸成するために実施する。

2) 夜を楽しむプログラム (所要時間：120分、担当：学生スタッフ)

夜ならではの暗闇を活かし、参加者のチームワークを高めるために行われるプログラムである。学生スタッフが企画・運営し、参加者と学生スタッフの関係性を高めるプログラムでもある。

3) 食を楽しむプログラム (所要時間：180分、担当：学生スタッフ)

野外活動ならではの食事を作る過程から楽しむプログラムである。過去にはうどん打ちや簡易かまどで作る手作りピザ、そしてバウムクーヘンなどが実施された。このプログラムは学生スタッフの企画力が問われ、手軽さと意外性、そして昼食としての要素も満たさなければならないが、毎年参加者の評価が高いプログラムである。

4) テント設営技術 (所要時間：90分、担当：学生スタッフ)

テント設営のレクチャーを受け実際に設営を行うプログラムである。仲間と協力して、宿泊するためのテントを自分たちで設営するので、真剣にプログラムに向き合う姿勢が現れる。出来栄にも差が出るため、集団の中の自分を意識する時間にもなっている。

5) 野外炊飯 (所要時間：180分、担当：学生スタッフ)

薪からの火付けを行いあえて不便な環境での調理をグループで協力して行うことで、単なる食事ではなく仲間づくりの有効なプログラムとして行うものである。1日目の夕食は学生にも馴染み深いカレーとし、目的を共有しやすくする。しかしながら、火付けがうまくできなかったり、カレーやご飯の水加減が不十分であったり、調理の手順がスムーズにいかず時間がかかったりなど、なかなかうまく進まないところに本プログラムのねらいがある。学生たちは、野外炊飯をはじめグループ活動を重ねるごとに、手順が効率化し、目を見張る成長を見せる。

6) 仲間と協力するプログラム (所要時間：120分、担当：教員、学生スタッフ)

会場全体にポイントを配置して実施するウォーキングプログラムである。参加者はマップを持ってグループごとに歩き、配置された有人・無人のポイントを歩く。無人ポイントにはその場に行かなければ解けないクイズが、有人ポイントには教員

もしくは学生スタッフが配置され参加者とコミュニケーションを図りながらスポーツプログラムにチャレンジする。参加者同士や参加者とスタッフ双方の交流を図ることができるプログラムである。

7) キャンプファイヤー（所要時間：120分、担当：教員、学生スタッフ）

最後の夜を彩るプログラムである。大きくは3部構成で行われ、第1部は井桁を囲んだキャンプファイヤーであり、大きな炎を囲んで交流を楽しんだり炎を見つめてこれまでのプログラムを振り返る時間である。第2部はトーチトワリングであり、学生スタッフがキャンプ実習の準備の合間に練習したトーチ（松明のこと）を回しながら行う演技を披露する時間である。なお、参加者の代表からもメンバーを指名し、この場で披露している。第3部は火文字であり、学生スタッフが炎により浮かび上がるメッセージを参加者に伝える時間である。これらのプログラムは幻想的な雰囲気の中で行われ、参加者にとって印象深い時間となっている。

②当該会場でしか体験できないプログラム

1) あかぎアドベンチャープログラム（所要時間：120分、担当：教員）

会場に専用施設が常設されており、本格的なアドベンチャープログラム（自己覚知やチームビルドを目的とした体験プログラム）が体験できるプログラムである。自分自身が勇気を出して挑戦することや、仲間と協力して課題を克服することを通して自分に自信が持てたり仲間の存在を心強く思えるようになるために実施する。

2) ナイトウォーク（所要時間：60分、担当：教員）

会場の敷地内に設定されたコースを、あえて夜に歩くプログラムである。暗闇と光、静寂と物音、自然と自分など五感を通して様々な感性を磨くために実施する。

3) 自然を楽しむプログラム（所要時間：90分、担当：教員）

会場の自然環境やロケーションを活かして、ネイチャーゲームを体験するプログラムである。自然への理解や仲間との協力、集団や自然の中の自分を意識するために実施する。

4) 水に親しむプログラム（所要時間：240分、担当：外部講師）

近隣の前橋市赤城少年自然の家にてカッター体験を行う。4日間の実習期間の中で、あえて生活の場である会場を離れ、会場では実施できないプログラムを体験することにより、自然への視野を広げるために実施する。

以上の視点を踏まえ、かつ移動時間を含めた3泊4日という期間の中でプログラム案を検討し、表2に「2017年度浦和大学キャンプ実習プログラム案」を示す。

5. まとめ

今回の検討を通して、障がい学生の本学キャンプ実習への参加が可能となる枠組みを整えることができたと考える。今後実施に向けた課題として次の3点に取り組むことが必要であ

表2 2017年度浦和大学キャンプ実習プログラム案

◆期間:未定
◆会場:国立赤城青少年交流の家

	1日目	2日目	3日目	4日目
7:00		7:00 朝のつどい	7:00 朝のつどい	7:00 朝のつどい
8:00		7:20 朝食(本館)	7:20 朝食(本館)	7:20 朝食(本館)
8:30	JR東川口駅集合→出発			8:30 キャンプ用具の管理・清掃 ～撤収作業～
9:00		9:00 仲間と協力するプログラム ～スポーツラリー～ (担当:教員)	9:00 あかぎアドベンチャー プログラム(担当:教員)	
10:00				10:00 グループ別ミーティング
10:30	開講式・オリエンテーション			11:00 閉講式
11:00		11:30 食を楽しむプログラム (担当:学生スタッフ)		
12:00	12:00 昼食(本館)	～昼食含む～	12:00 昼食(本館)	
13:00	13:00 コミュニケーション・ゲーム (担当:教員)		13:00 水と親しむプログラム ～カッター体験～ (担当:外部講師)	12:30 昼食(本館)
14:00	14:30 テント設営法 (担当:学生スタッフ)	14:30 自然を楽しむプログラム ～ネイチャーゲームの体験～ (担当:教員)		13:30 出発
15:00				15:30 JR東川口駅到着→解散
16:00	16:00 野外炊飯～カレーライス～ (担当:学生スタッフ)	16:30 パーベキュー講座 (担当:教員)		
17:00	17:00 タベのつどい	17:00 タベのつどい	17:00 タベのつどい	
18:00	17:30 野外炊飯(続き)	17:30 野外炊飯～BBQ～ (担当:学生スタッフ)	17:30 夕食(本館)	
19:00			19:00 キャンプファイヤー (担当:教員、学生スタッフ)	
20:00	19:30 ナイト・ウォーク (担当:教員)	19:30 夜を楽しむプログラム (担当:学生スタッフ)		
21:00	20:30 自由時間・入浴(シャワー)	21:00 自由時間・入浴(シャワー)	21:00 自由時間・入浴(シャワー)	
22:00	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	
23:00				
23:30	23:30 全体消灯・最終見回り	23:30 全体消灯・最終見回り	23:30 全体消灯・最終見回り	

※朝のつどいとタベのつどいは会場の必須プログラム
※スケジュールは天候やプログラムの進行により変更することがある
※雨天プログラムは別途検討する

ろう。

1点目は障がい学生自身の参加意思の確認や期待である。事前の面談時には興味を示していたものの、これまで宿泊での野外活動体験が無いことから最大限の情報を提供し、施設や教員、学生スタッフによる支援の方法を示し、緊急時の対応についても説明するなど、できる限り不明な点を明らかにした上で参加の意思を確認する必要がある。

2点目はご両親の理解を得ることである。芝原らの報告によると、家族はできる限りスポーツ活動に参加させたいと考えている一方で、身体的負担やケガ等のリスク管理に不安があることを示唆している^[12]。障がい学生が参加するキャンプ実習を実現する場合、障がい学生のご両親の理解と協力は不可欠であり、1点目同様ご両親に対しても丁寧な情報提供を行うとともに、実習期間中は随時連絡が取れる体制を構築するか、場合によっては実習施設での待機など大きな負担を依頼することも想定される。

3点目は学生スタッフの教育である。例年健常の学生のみを対象としているが、キャンプ実習中の生活支援や活動支援においては常に障がい学生への支援を想定して企画・準備・実施を心掛けなければならない。そのためには、スタッフマニュアルの整備とマニュアルに沿ったプログラム遂行のシミュレーションが不可欠であろう。学生スタッフにとっては役割も責任も過重な負担となることが予想されるが、李らは学生にとっての障がい者ボランティアの成果として「障害者に対する意識や態度が肯定的に変化していることから、ボランティア活動は、障害者と健常者の共生社会を実現するための一助となることが期待される。」と報告している^[13]。このことから学生スタッフには理解を求め、熱心な関わりを期待するところである。

石田は障がい者キャンプを行う意義として次の8点を挙げている^[14]。①レクリエーションとしての意義、②治療・リハビリの効果(療育)、③社会性を育む、④障壁を超える、⑤ノーマライゼーションの実践、⑥青少年の育成、⑦レスパイト・ケア、⑧社会の問題の明確化。障がい学生が参加する本学のキャンプ実習は、まさにこれらの点を具現化する活動になるはずである。この貴重な機会を、障がい学生自身やご家族、大学、実習施設、学生スタッフ、そして担当する教員が、お互いの連携・調整を最大限に図り、成果をあげていきたい。

引用文献

- [1] 内閣府ホームページ, 障害を理由とする差別の解消の推進,
<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>, ([アクセス日] 2017年4月5日)
- [2] 浦和大学総合福祉学部, 2016SYLLABUS, p39, 2016年
- [3] おにし青少年野外活動センターホーム, TOPページ,
<http://www.taiken-katudou.org/index.html>, ([アクセス日] 2017年4月5日)
- [4] 特定非営利活動法人青少年体験活動研究所, おにし青少年野外活動センター利用案内, p2-7, 2008年
- [5] 国立妙高青少年自然の家, 平成28年度利用の手引き, 2016年

- [6] 国立赤城青少年交流の家, 平成28年度利用ガイド, 2016年
- [7] 国立赤城青少年交流の家, 平成28年度プログラムガイド, 2016年
- [8] 国立那須甲子青少年自然の家, 平成28年度概要 (2016OUTLINE), 2016年
- [9] 国立那須甲子青少年自然の家, 利用の手引き, 2016年
- [10] 国立磐梯青少年交流の家, 利用の手引き, 2013年
- [11] 国立磐梯青少年交流の家, アクティビティ集, 2016年
- [12] 芝原美由紀、八並光信、一場友実、斉藤利恵、塩之谷巧嘉, 肢体不自由児の体育・スポーツ活動の現状と課題, 第48回日本理学療法学会大会, 口頭発表0-B神経-174, 2013年
- [13] 李在億・中村圭子・栄長敬子, 障害者とボランティア活動に対する学生の意識変化—ボランティア参加者の調査結果から—, 新潟青陵学会誌3巻2号p25-30, 2011年
- [14] 石田易司, 障害者キャンプマニュアル, エルビス社, 2000年

Summary

An attempt of a camp practice program that students with disabilities can practice

Akiyoshi Katayama, Yusuke Nakajima

“The Act for Eliminating Discrimination against Persons with Disabilities” was enforced in 2016, and educational institutions like universities that have students with disabilities are demanded to pay rational attention to them. Therefore, since we are going to have a student using a wheelchair who enrolled in our health and sports course in FY2017, we decide to examine a venue and implementation program of the camp training to be carried out off-campus. After we nominate some candidates of training ground, conduct a field survey on-site, carry out interviews with other persons in charge, and scrutinize the information of materials, we try to create, in assuming a venue, an implementation program in which we continue to inherit the features of our camp training and take advantage of the charm of the venue.

Keywords Disabled students, camp training, outdoor activities, symbiotic society

(2017年5月18日受領)